

論文審査の結果の要旨および担当者

報告番号	※	第	号
------	---	---	---

氏 名 陳 建 璋

論 文 題 目 台湾人日本語学習者による日本語のアスペクト形式「テイル」の
習得について

論文審査担当者

主 査	名古屋大学教授	杉村泰
委 員	名古屋大学教授	玉岡賀津雄
委 員	名古屋大学准教授	鷺見幸美

本論文は台湾人日本語学習者による日本語のアスペクト形式「テイル」の習得について論じたものである。本論文では「テイル」の習得に関わる要因として、①「テイルの用法」（動作の持続、結果の状態、パーフェクト、繰り返し、単なる状態）、②「動詞タイプ」（活動動詞、達成動詞、到達動詞、状態動詞）、③「時制形式」（テイル形とテイタ形）、④「構文的位置」（文末と連体修飾節）、⑤学習者の「日本語学習期間」（1年、1年半、2年、2年半）の5つを取り上げ、これら5つの要因の影響の度合いや各要因間の相互作用を明らかにした。以下、本論文の概要と評価について述べる。

[本論文の概要]

本論文は、序論の章と結論の章を含め、全部で9章からなる。

「第1章 序論」では、日本語学習者にとって「テイル」を正確に使いこなすのは必ずしも容易ではないことを論じ、これまでの「テイル」の習得に関する研究には下記の5つの問題点が残っていることを指摘している。

1. 「アスペクト仮説」の検証と「テイル」の用法の習得難易度のいずれかの側面からのみ分析が行われており、両者間の関連について論じられていない。
2. 異なるレベルの学習者の「テイル」の習得状況を考察したものはまだ少ないため、日本語レベルの違いによって「テイル」の習得状況にいかなる変化があるのかについての検討はまだ不十分である。
3. これまでの「テイル」の習得研究では、主に文末の習得状況に焦点が置かれているため、文末と連体修飾節の構文的位置の違いが「テイル」の習得にどのように影響しているかについてはあまり論じられていない。
4. これまでの「テイル」の習得研究では、主に現在時制「テイル形」の習得を中心に行われており、「テイル形」と「テイタ形」の時制形式の違いについて殆んど論じられていない。
5. 「テイル」の習得に関わる複数の要因による影響の度合いと、それらの相互作用についての考察が欠如している。

「第2章 先行研究と本研究の位置づけ」では、「テイル」に関する先行研究を概観し、大別して動詞の語彙的アスペクトの観点から考察したものと、「テイル」の様々な用法の習得難易度の観点から考察したものと2つがあることを指摘している。前者は「アスペクト仮説」の普遍性を検証するために、動詞を「限界性(telicity)」があるかどうか、「瞬間性(punctuality)」があるかどうかといった動詞(句)に内在する語彙的アスペクトによって「活動動詞」（「走る」「歩く」など）、「達成動詞」（「作る」「壊す」など）、「到達動詞」（「落ちる」「死ぬ」など）、「状態動詞」（「ある」「いる」など）といった動詞タイプに分類し、「テイル」がどの動詞タイプと結び付きやすいかについて考察したものであり、後者は「テイル」の表す意味を「動作の持続」、「結果の状態」、「パーフェクト」、「繰り返し」、「単なる状態」などの用法に分類し、各用法の習得難易度について考察したものである。これに対し、本論文は両者を融合した研究が必要であることを主張し、下記の5つの研究課題を提示している。

研究課題1： 「テイル」の各用法内における動詞タイプ別の使用率について日本語母語話者と日本語学習者の異同点を明らかにする。

研究課題2： 「テイル」の習得における5つの要因（「テイル」の用法、動詞タイプ、時制形式、構文的位置、日本語学習期間）の影響の強さを明らかにする。

研究課題 3 : 「日本語学習期間」の違いによって、「テイル」の習得がどう違うのかを明らかにする。

研究課題 4 : 「構文的位置」(文末と連体修飾節)の違いによって、「テイル」の習得がどう違うのかを明らかにする。

研究課題 5 : 「時制形式」(テイル形とテイタ形)の違いによって、「テイル」の習得がどう違うのかを明らかにする。

「第 3 章 日本語母語話者における「テイル」の使用状況」では、「現代日本語書き言葉均衡コーパス (BCCWJ)」の「少納言」を利用して、日本語母語話者の「テイル」の各用法における動詞タイプ別の使用率について、構文的位置や時制形式の違いを考察した。その結果、日本語母語話者は「テイル」の 5 つの用法のうち、「結果の状態」(39.9%)の使用率が最も高く、次いで「動作の持続」(28.2%)、次に「パーフェクト」(13.5%) 或いは「単なる状態」(12.5%) となり、「繰り返し」(6.8%)の使用率が最も低いことを明らかにしている。一方、動詞タイプ別の「テイル」の使用率を見ると、「到達動詞」(36.3%)の使用率が最も高く、次いで「活動動詞」(31.4%)、次に「達成動詞」(22.2%) となり、「状態動詞」(10.1%)の使用率が最も低いことを明らかにしている。さらに、これらの順序は構文的位置と時制形式の違いによってあまり変わらないことを指摘している。

「第 4 章 学習者の調査の概要」では、台湾人日本語学習者の「テイル」の習得に関する調査の概要について説明している。本論文では「台湾人日本語学習者コーパス(CTLJ)」に収録された作文データを利用し、CTLJにおいて2年間で4回分(半年ごとに1回)の作文が揃っている40名の学習者による計160篇の作文データを調査対象としており、CTLJから「テイル」の「正用」、「非使用」、「過剰使用」、「テンスの誤り」を抽出する方法について論じている。

「第 5 章 「テイル」の習得に影響する要因」では、学習者の「テイル」の習得過程において、①「テイルの用法」、②「動詞タイプ」、③「時制形式」、④「構文的位置」、⑤「日本語学習期間」の5つの要因が「テイル」の習得に如何なる影響を与えるのかについて検証するため、これら5つの要因で学習者の「テイル」の正誤用の頻度を予測する分類木分析を行った。その結果、学習者の「テイル」の習得に最も強く影響する要因は「テイルの用法」であり、次いで「動詞タイプ」と「時制形式」の2つの要因が同程度で続き、次に「構文的位置」、次に「日本語学習期間」の順となることを明らかにしている。

「第 6 章 日本語学習期間による「テイル」の習得状況」では、「テイル」の各用法における動詞タイプ別の正用率、およびそれが学習者の日本語学習期間によってどのように違うのかを検証するために、①「テイルの用法」、②「動詞タイプ」、③「日本語学習期間」の3つの要因で「テイル」の正誤用の頻度を予測する分類木分析を行った。その結果、学習者の「テイル」の習得は「二回目」の調査時点(学習期間1年半)で止まっており、たとえ学習者の学年が上がっても「テイル」の習得はそれ以上進まないことを明らかにしている。また、4つの調査時点のうち「一回目」の調査時点を除く他の3つの調査時点で「テイルの用法」の違いによる影響が見られることを指摘している。この場合、5つの用法のうち最も習得されやすいのは「動作の持続」と「単なる状態」の2用法であり、続いて「結果の状態」と「繰り返し」の2用法であり、最も習得されにくいのは「パーフェクト」の用法であるという習得難易度が明らかにしている。さらに、「動作の持続」と「単なる状態」の2つの用法では「動詞タイプ」の影響が見られることを指摘している。4つの動詞タイプのうち「活動動詞」、「達成動詞」、「到達動詞」の3つの動詞タイプ(正用率87.3%)は「状態動詞」(正用

率 70.3%) より正用率が有意に高いことから、「動作の持続」と「単なる状態」の 2 用法において「状態動詞」と「テイル」との結びつきは、学習者にとって他の動詞タイプより習得されにくいものであることを指摘している。

「第 7 章 「構文的位置」による「テイル」の習得状況」では、文末と連体修飾節の構文的位置の違いによる「テイル」の習得状況について考察している。その結果、学習者にとって、文末（正用率 72.3%）よりも連体修飾節（正用率 81.0%）における「テイル」のほうが習得しやすいことを明らかにしている。さらに、文末と連体修飾節における「テイル」の各用法に使用された動詞タイプ別正用率の分析結果では、文末において、「動作の持続」、「繰り返し」、「単なる状態」の 3 つの用法では、動詞タイプの違いによって正用率に明確な差が現れ、「活動動詞」と「到達動詞」の 2 つ（正用率 87.2%）は「達成動詞」と「状態動詞」の 2 つ（正用率 72.1%）よりも正用率が高いのに対し、連体修飾節では「テイルの用法」と「動詞タイプ」による正用率の違いはあまり見られないことを明らかにしている。このように、文末と連体修飾節の違いによって、「テイル」の各用法における動詞タイプ別の使用状況が異なることを指摘している。

「第 8 章 「時制形式」による「テイル」の習得状況」では、「テイル形」と「テイタ形」の時制形式の違いによる「テイル」の習得状況について考察している。その結果、「テイル形」の正用率（78.7%）は「テイタ形」の正用率（65.5%）より有意に高いことから、学習者にとって「テイタ形」の習得は「テイル形」の習得よりも困難であることを明らかにしている。さらに、「テイルの用法」と「動詞タイプ」の 2 つの要因による「テイル形」と「テイタ形」の正用率への影響を分析した結果、「テイル形」の習得では「テイルの用法」と「動詞タイプ」の 2 つの要因の影響とも見られたことを指摘している。このうち、学習者の「テイル形」の使用に最も強く影響していた要因は「動詞タイプ」の違いであることを明らかにしている。4 つの動詞タイプのうち、「活動動詞」と「到達動詞」の 2 つ（正用率 82.7%）は「達成動詞」と「状態動詞」の 2 つ（正用率 67.6%）よりも正用率が高いことや、「活動動詞」と「到達動詞」の使用では、「テイルの用法」の影響が見られ、5 つの用法のうち「動作の持続」と「単なる状態」の 2 つの用法の正用率（89.0%）が最も高く、次いで「結果の状態」と「繰り返し」の 2 つの用法（正用率 78.5%）、最後に「パーフェクト」の用法（正用率 40.0%）となったことを明らかにしている。このように、同じ「活動動詞」と「到達動詞」でも「テイル」との結びつきにより表される意味の違いで、学習者の「テイル形」の習得状況に影響していることを指摘している。一方、「テイタ形」の習得では「テイルの用法」の違いによる影響は見られないことや、5 つの用法のうち、「動作の持続」と「単なる状態」の 2 つの用法は「結果の状態」、「繰り返し」、「パーフェクト」の 3 つの用法よりも正用率が高いという「テイル形」の場合とは異なる結果となることを指摘している。

「第 9 章 結論」では、第 2 章で提示した研究課題に沿って、各章の調査結果で明らかになったことをまとめ、残された課題について論じている。

[本論文の評価]

本論文は分類木分析を利用して「テイル」の習得過程における①「テイルの用法」、②「動詞タイプ」、③「時制形式」、④「構文的位置」、⑤「日本語学習期間」の 5 つの要因の影響、および各要因間の相互作用を明らかにした優れた論文である。とりわけ、以下の各点において審査委員から高く評価された。

別紙 1 - 2

- 1) 研究のデザインが綿密で、極めて論理的に論証されている。文章も分かりやすく読みやすい。
- 2) 先行研究について十分な検討が加えられ、これまでの研究の成果と問題点を明確に指摘したうえで、研究史上意義のある研究課題が提示されている。
- 3) 従来あまり統一的に論じられてこなかった「テイルの用法」と「動詞タイプ」の2つの側面の関係について、先行研究を越える緻密な分析がなされている。
- 4) これまで個別に論じられてきた①「テイルの用法」、②「動詞タイプ」、③「時制形式」、④「構文的位置」、⑤「日本語学習期間」の5つの要因の影響、および各要因間の相互作用について、分類木分析によって実証的に検証されている。
- 5) 台湾人日本語学習者の「テイル」の習得における困難点を明らかにし、日本語教育に貢献する提言を行っている。

一方、審査員から以下のようなコメントもあった。

- 1) データとして利用した作文のテーマによる影響は避けられないのではないか。作文データの個人差についても見る必要があるのではないか。
- 2) 作文データのみでは使用を回避した場合のことは分からないし、たまたま作文に出現した表現のことしか論じられない。そのため、文法性判断テストなど補助的な調査も行うとよかったのではないか。
- 3) 「テイル」の習得においてどのような要因が影響するのかについては詳細に論じられているが、なぜそのような結果になるのかについては議論が不十分である。結果の解釈についても深められるとよかった。

このように本論文には、不十分と思われる個所も見られる。しかし、本研究で行った分類木分析による実証的研究は先行研究の指摘を十分に超えるものであり、本研究が第二言語習得研究にとって重要な位置にあることを指し示すものである。全体的に見た場合、本論文は論旨が整然としていて、完成度の高い優れた論文である。

以上の評価に基づき、審査委員全員一致して、本論文が博士学位論文として十分にその水準に達していると判断した。